

修養と宗教

合掌、鳥取県での講習中お尋ねしてみようと思いましたが、ついにその機会なくして終りました。浄土真宗と修養ならびに修養団に関して先生の厳肅なご批判を承りたいと存じます。修養によつて救われざる自分であることは申すまでもありません。また修養は宗教の門をたたくになくてはならぬ道程でもあります。私は私の過去の修養、それが最も尊いものであつたことを知ると同時に、ますます今後の修養に努めたいと思ひます。修養そのものの柵の中にとらわれないう。

修養団のやつているエプロンや白鉢巻、それはどこまでも偽善に違ひないでしょう。さてこれについて今、甲は偽善だから捨ててしまふというに對して、乙はその偽善であることは知りぬいており、それによつて美しくなるものでないことは知つてゐるが、エプロンや鉢巻を捨てる必要はない。甲はそんなものを捨てた偉い人間です。けれども、私は私の心を深く探る時、あのエプロンや鉢巻した姿こそ本当の私の姿だ。私は偽善をちつともしない人間ではない。つまり私が言うのはエプロンをかけろかけぬ、そんなことは問題じゃなくて、そんなことにこだわらないのですと言つてゐます。先生、この二人、今にも鉢巻を捨てようとする甲と、そのままどこまでもこれを深く掘り下げてゆく乙と、これについて徹底的なご批判をお願いしたいと存じます。

答、人間なるがゆえに

手紙でお答えするはずですが、紙上に載せて一般の方ともいつしよに味わせていただきたいと存じます。まず第一に、修養と宗教との關係について愚見をのべます。道徳的修養とは、われらの理性価値の満足であります。言いかえると、悪と善と對立するわれらの現実を見つめて、善によつて悪を統一しようとするのであります。いわゆる「悪修善の道」であります。これは人間である以上、当然持たねばならぬ意欲であります。しかしこの道は、あなたも「修養によつて救われざる自分であることは申すまでもありません。」と言つていられるように、善にむかつて開く眼はまた、悪についても開く眼であります。智者が無智を知り、美を好めば醜もまた申す見えてくると同じであります。かく善だけになりきることはできないのが人間であります。人間は神でないとともに、獣になりきれない、とともに神のように透明になることもできません。善だけになりきれたと思うのは一時の錯覚であるとともに、なりきれると思ふのは高慢であります。ですから善を求め、善を実行しようとする心が高まれば高まるほど、悪の根強さに泣かない者はありません。親鸞聖人はこうした世界に強い宿業を感じられました。本月号の「無想録」(都合により来月に廻します)の『宿業觀を尊ぶ』という一文をごらんください。岩壁のような宿命を感じるのは、一つの道に精進した者の当然の相であります。私どもはこのおちつけない「悪修善の世界」で救われたいのはもちろんであります。

権仮から真実へ

聖親鸞はそこをご和讃において、

「念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ。」

と申されました。ここにあらわれたお言葉を注意いたしますと、権と実、真と仮の対立が出ています。これをまとめますと、真実と権仮になります。さらにこれに虚偽を加えますと、いよいよはつきりわかつてきます。すなわち世界は虚偽と権仮と真実とであり、虚偽はもちろん、ゆるされぬいつわりであります。権仮とは真実に至るべき道程であります。権仮の前に現れるものが、方便化土であり、真実の前に開けるのが真実浄土であります。私どもは、仮の世界と、真実の世界とを選ぶことを尊ぶのあまり、仮の世界を偽とけなしてはいけないとともに、仮の世界に執着して、これを真実だと執着してはなりません。権仮とは諸善万行であり、真実とは念仏のことです。善悪対立の行きづまりは、より高次の善である念仏によつて統一せられることによつて、はじめて、善人は善人のまま悪人は悪人のままで救われる、善悪撰取の無碍道が開かれてまいります。親鸞聖人は幾度も、本願の前には「善悪浄穢もなき」ことをお説きになりました。如来の前には、一切衆生は無差別平等に救われてゆくことを示されたのであります。真宗の救いの世界を表わした言葉に、「転悪成善」というのがあります。廃悪修善の世界から転悪成善の世界への転回こそ、権仮から真実へ、道徳から宗教への歩みであります。煩惱を氷や柿の渋によく喩えられます。氷を無くするのではなくて、渋をなくするのではなくて、氷が水に転じ、渋そのまま甘柿となるのであります。如来の本願の世界に救われて、お念仏申すことによつてわれらのすべては満たされて、しつくりおちつかしていただけるのであります。

修養を尊ぶ

あなたは過去、真剣に修養に志されました。それは尊いことであります。少なくとも無自覚な、ぐうだらな放縦生活には、修養ということはありません。修養に志して進まれたことは尊いことだと存じます。そしてそれはけつしてむだなことではありませんでした。もちろん修養によつてすべてが解決されたとうぬぼれたり、官庁から模範青年だと表彰されて有頂天になったり、自ら修養家をもつて任じたりすることは恐ろしい自己欺瞞でありますけれども、真剣に修養に自己を打ち込んでゆくことはもつともつと深い世界への道程として通らなくてはならぬことであります。立つて見なければ坐つていた所は見えませぬ。あなたは講習の間にもたびたび自分の世界が打ちのめされたことを言つていられました。しかしそれは、過去が誤であつたというよりは、通るべき世界であつたのであります。

修養に対する注意

流汗鍛練、同胞相愛の修養団の世界は、確かに人生の、ある大切な世界であります。もしそれが、人類の全体だなどと固執したり、うぬぼれたりしないかぎりにおいて、修養団でも宗教が大切であることを主張されるようですが、流汗鍛練、同胞相愛の

モットーの中からは宗教は生まれてきませぬ。愛についても、深い内省や、研究や、深さへの展開や、疑問があります。

特に注意しなくてはならないことは、美しい歌とともに踊ったり、修養動作一日二日の練習によつて、朝は何も考えずに集まったものが、夕方には一かどの聖者にでもなつたような気になつて帰ることは悲しむべき浅薄であります。その粗雑な考え方はすぐ、一夕の嵐に散つて、もつと深い悪い世界にすべりおちたりします。おたがいに気をつけねばならぬことであります。眠れる魂が一日の機縁にふれて生活の上に尊きものを実践しようと思ふことによつて、一日の修養は意義を持ちます。

エプロンや鉢巻は平素の労働の象徴であり、その時の空気を造るためかも知れませんが、仕事する時にエプロンをかけ、鉢巻することは当然です。何も問題にするに足らないと存じます。私どもも講習の時にラジオ体操をしましたが、それは、健康のためであり、一日の講習の出發、仕度であつて、軽い意味でした。だれ一人それを云々するものはありませんでした。あなたが修養団の講習会でいつまで満足していられるかは問題ですが、修養に志すことはいいことです。ただ、修養の一方法として宗教を弄ぶならば、あなたはついに、宗教それ自身の真髄にはふれ得ないであります。しかし、一度純宗教の世界に救われても、やはり社会公人として、その生活が倫理的であるべきことは当然でありますから、不断の修養をつまねばなりません。これ真俗二諦とて、信決定の人にもますます修養に志さねばならぬゆえんであります。エプロンを棄てる捨てぬはたいした問題ではありません。要はその本質の問題であり、深さの問題であります。